新年のご挨拶

四国経済連合会
会長　大西　淳

皆さま、明けましておめでとうございます。
新年を迎えるにあたり、所感の一端を述べさせていただきます。

皆さまご承知のとおり、わが国経済は、米国発の金融危機が世界中に飛び火したことで、これまで成長を牽引してきた輸出の急速な落ち込みに加え、非正規社員の解雇や新卒の内定取消しなどの動きも拡がるなど、景気は後退局面に入ってしまいました。昨年末に発表された民間調査機関の平成21年度の経済見通しでは、原材料価格の下落や緊急経済対策の効果が見込まれるものの、欧米を中心とした海外経済のより深刻な低迷なども予想され、２年連続のマイナス成長になるとの見通しが大勢を占めております。

また、四国経済も、全国同様、昨年末から急速に後退色が強まっています。すなわち、個人消費の低迷や企業収益の悪化に加え、これまで比較的底堅く推移していた生産活動も紙・パルプ、半導体、自動車部品などで減産の動きが広がっています。こうした状況を反映して、四経連が昨年12月に実施した企業経営者の景況感は、景気が「低迷・底ばい」または「下降」と見る企業が99%に達し、特に「下降」と見る企業が調査開始以来最悪となる65%にまで増加するなど、四国の景気も極めて厳しく、回復するまでには少し時間を要するのではないかと思います。

このような時にこそ、政治がリーダーシップを発揮し、国民に拡がりつつある不況や雇用、さらには年金や社会保障制度といった将来に対する不安の払拭に努めてもらわなければなりませんが、同時に私たち経済界がそれぞれの立場で活路を切り開いていくことが是非とも必要であります。

今回の米国サブプライム問題による金融危機で、世界の金融機関が被った損失は、今後、数年間で約143兆円に上ると国際通貨基金（IMF）が推計しており、これが世界経済の急速な悪化の大きな要因となっております。しかし、振り返ってみますと、かつて失われた10年と言われた90年代のバブル崩壊以降の長い不況を、私たちは乗り越えてきたのです。93年以降、公的資金約47兆円を投入し、銀行はこれまでに約100兆円の不良債権処理を行う一方、企業は額に汗し、手に技をつけていく実業の世界、いわゆるモノづくりの大切さを見直すことによって、デフレにも適応できる低価格で質の良い新しいサービスや製品等を生み出してきました。今回もそうした経験などを活かし、日本の伝統であるモノづくりの原点に立ち返る必要があろうかと思います。

四国には、そもそも競争力のあるモノづくり企業が多く、次代を担う新しい技術の芽生えも見られているので、そのポテンシャルを最大限

に発揮することによって、この荒波を乗り越えるとともに、自立的発展を成し遂げることができると確信しております。

また、このような地道な努力と併せて、中長期的な観点からは、わが国全体が活力を取り戻すためにも、地方を疲弊させている元凶である現行の中央集権体制、東京一極集中から「地域自らが考え、行動し、責任を持つ」という地方分権型社会への移行が不可欠であります。その究極的な姿とも言える道州制の検討が、政府・与党や経済団体等で進んでおり、道州制の理念や目的、国と地方の大枠の役割分担といった基本的な枠組みについての認識は共有されつつあると感じております。

今後、具体的な制度設計の検討が進んでいきますが、その際には、四国のような地方にとって、どのような道州制が望ましいかという視点が極めて重要になります。四経連では、区割りについては、四国は一つの島であり、住民が帰属意識を強く持てることや、人口や経済規模でも先進国一国に匹敵することなどから、「四国州が適切である」と考えております。その上で、四国から見て、地方が自立できる税財政制度はどうあるべきか、また道州制によって四国はどう良くなるのかなどについて検討し、近く提言を行うとともに、四国州の実現に向けて、地域の幅広い議論を喚起していきたいと考えております。

最後になりましたが、現在の厳しい情勢にあっては気持ちも縮みがちになりますので、年の初めということで、少し明るい話題を拾ってみました。まず、今年５月には、瀬戸内しまなみ海道が開通10周年を迎えます。また、四国ゆかりのドラマが相次いで放映されます。今年の秋から３年間にわたり、NHK のスペシャルドラマで「坂の上の雲」が、そして朝の連続テレビ小説では徳島を舞台にした「ウェルかめ」が始まり、来年は NHK の大河ドラマで「龍馬伝」が放送されます。さらに香川県では、来年「瀬戸内国際芸術祭」と「第２回高松国際ピアノコンクール」という国際的な芸術・文化イベントが開催される予定になっています。これらは、国内外に向けた四国の情報発信ができるものとして大いに期待すると同時に、本四連絡橋の通行料金引下げも予定されていることから、交流人口の拡大に繋げることができるように、四国が一体となった取り組みを積極的に進めていくことが極めて重要になると思います。

そうした意味でも、今の四国経済にとって目指すべき「坂の上の雲」とは「生き生きと元気な四国の実現」であり、それに向けて、今年の干支である丑（うし）のように、それは牛歩のように遅々として歩むのではなく、スペインの「牛追い祭り」の牛のように、勢いよく障害を乗り越えて前進していく１年にしたいと考えております。

新しい年が皆さまにとりまして、素晴らしい発展の年となりますことをお祈りいたしますとともに、本年も引き続き四経連の活動に対しまして皆さまのご支援、ご協力をよろしくお願い申しあげます。